

2022年12月25日降誕日

イザヤ書 52 章 7-10 節

ヘブライ人への手紙 1 章 1-12 節

ヨハネによる福音書 1 章 1-14 節

先週は、礼拝中に体調を崩し大変失礼いたしました。緊急搬入先の病院で、特に命に別条がある状態ではないと診断されましたので、無事帰宅いたしました。原因は不明ですが、体調管理により一層気を付けたいと思います。

さて、降誕日の福音書は、A B C 共通です。また、ルカによる福音書とヨハネによる福音書が選択となっていますが、本日は、ヨハネによる福音書から学びたいと思います。

ヨハネによる福音書は、四つの福音書の中で最後に書かれたと考えられますが、その背景は複雑です。ユダヤ教の影響だけではなく、ヘレニズム文化圏の思想や宗教の影響もあるからです。しかし、福音書著作の目的は、非常に明確です。それは、福音書の最後の部分にありますように、「**イエスがキリストであり、信じて命を得る**」（ヨハネ 20：30）ためと明記されているからです。この目的は、ヨハネによる福音書の内容が、時間と空間を超えて、世界がどれほど混乱の中にあっても、何を信じるべきかを明確にしているといえます。

今朝の部分は、ヨハネによる福音書の冒頭です。ここは、「**あった**」ものと「**なった**」ものとが、対照的に描かれています。1 節から 2 節では、「**初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は、初めに神と共にあった**」（ヨハネ 1：1-2）とあり、「**あった**」ものとは、「言」、「神と共にということ」、「神様」、「命」、「光」であることがわかります。そして、3 節では、「**万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった**」（ヨハネ 1：3）とあり、そこでは、「**なった**」ものとは、「万物」、「肉体」だとわかります。「新共同訳」では、次の 4 節が「**言の内に命があった。命は人間を照らす光であった**」となっていますが、新しい「聖書協会共同訳」では「**言の内に成ったものは、命であった。この命は人の光であった。**」（ヨハ 1：4）となっています。「**言の内に命があった**」と「**言の内に成ったものは、命であった**」、両者とも文法的には問題ないのですが、内容が異なります。1～2 節が「**あった**」もの、3～4 節が「**なった**」ものとの対比があると考えますと、新しい「**言の内に成ったものは、命であった**」が良いと思います。つまり、「**あった**」ものが前提となり、そこから「**なった**」

ものが存在し、その中で最も基礎的で大切な事柄は、「いのち」であり、その「いのち」が、人間を照らす「光」で「あった」と示しています。

さて、このヨハネによる福音書の冒頭にある「あった」ものとは、根本的な存在の概念を示しているといえます。つまり人間と直接関わりなく、全ての存在という事柄の基礎を示しているのです。しかし、この「なった」ものとは歴史の中で生成したものであり、それは主なる神様が、人間の歴史と関わりながら生成されたものを示していると言えます。

しかし、「あった」ものであり、また「なった」ものでもあるのが、「言（ことば）」です。最初からある「言（ことば）」は、人間と関わろうとする意志があるということです。言い換えれば、この「言（ことば）」は、主なる神様の何かを産み出す力、意志といってもよく、主なる神様とは切り離せない、その本質の現れ・形なのです。この「言（ことば）」の中で「なった」ものが「命」であり、その「命」がまた、「光」で「あった」と本日の箇所は断言します。

5節は、「新共同訳」では、「**光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった**」となっています。新しい「聖書協会共同訳」では、「**光は闇の中で輝いている。闇は光に勝たなかった**」となっています。前半部分は同じですが、後半部分は異なります。ここは前の「口語訳」では、「**光は闇の中で輝いている。闇は光に勝たなかった**」となっていました。新しい訳は、前の訳に戻ったとも言えます。「理解しなかった」と「勝たなかった」とではずいぶん意味が異なりますが、文法的にはどちらも間違いではありません。しかし、やはり「闇は光に勝たなかった」が、内容的にはよい訳だと思います。イエス様の十字架は、闇の力が一瞬勝ち誇ったように見えた出来事でしたが、光の勝利に他ならなかったからです。

主なる神様の「言（ことば）」は、働きとして、創造、啓示、贖い、救いにおいて現われます。主なる神様は、「言（ことば）」によって様々なことをなさってくださいますが、そのもっとも素晴らしい事柄が「あった」「光」が「肉体」に宿ったイエス様の出来事にほかなりません。

本日の福音書の最後、14節に「**言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた**」とあります。その「光」が肉体に宿ったこと、それがイエス様だと示しています。そして、わたしたち人間は、そのイエス様の栄光を、福音書を通して見ます。つまり、福音書の中で描かれている様々な奇跡と教えの働き、そして十字架の死と復活、それらを通して、父の独り子としての栄光を見るのです。そして、そのイエス様が示す栄光の中

に、わたしたちの人間の生活にとって、なくてはならない「恵」と「真理」を見出すのです。

「ヨハネによる福音書」は、このイエス様の出来事を、「しるし」として次々に記していきます。そこで描かれている「肉体」にやどったこと、受肉とは、決して仮に肉体を取ったという意味ではありません。わたしたちと同じ肉体を取ったのです。つまり、喜びもあると思いますが、痛みや悲しみ、寒さや暑さ、飢えや渇きをも感じる肉体を取ったのです。そのように人性と神性の両者をもった独り子として、本来、主なる神様を見ることのできない人間に、わかりやすい姿として現れ、そのイエス様に救いの約束があると宣言しているのです。

それゆえに、イエス様は、わたしたち人間が、どんなに困難中にあっても、わたしたちを励ます「恵み」をくださるのです。また、今何が大切か、今起きていることをどのようにとらえたらよいか、わたしたちがわからなかったとしても、道を示す「真理」を示してくださいます。そして、わたしたちは、このイエス様を信じることを通して、救いの確信を得るのです。

本日、世界中の教会が、イエス様の誕生を祝っていると思います。わたしたちもその教会の一つです。わたしたちは、クリスマス寒波といわれるぐらい例年よりは少し寒いのですが、安全の中でご一緒にお祝いし、救いの確信を得ようとしています。そうではない地域でもクリスマスをお祝いしていると思います。平和を願いながら戦いの中で、あるいは温かさを求めながら寒さの中で、食べ物を求めながら飢えの中で、クリスマスをお祝いしている場所もあるかもしれません。あるいは、クリスマスなどお祝いする余裕がない場所もあるかもしれません。逆に、そのような場所であるからこそ、イエス様の誕生した意味、イエス様を信じる信仰が深まるといえるのかもしれませんが。

わたしたちが温かさと安全・平和の中で、イエス様の誕生を祝うとき、わたしたちは、この世界にまことの希望があることを確信します。それは、イエス様が示すまことの希望があるからこそ、争いあうことも、奪い合うことも、まことの希望ではないことを確信することです。

2022年はもうすぐ終わります。本日は、2022年最後の主日です。しかし、新しい教会歴はもう始まっています。わたしたちの教会は、もう新しい暦を歩み始めているのです。いつの日か、イエス様によって、世界にまことの平和が訪れるように願いつつ、これからも礼拝を通して、まことの希望を実感し、わたしたちの中で、その希望の灯をともし続けたいと思います。